脚本
レストラン・ア

karasuno10

http://unohirotest.mydns
.jp/hiroshi/cgi/top.pl

再会

レストラン・アタック

烏野　博史

人　物

中里康（なかさとやすし）（78）オフィシャルグルメ・オーナー
沢地邦子（さわちくにこ）（75）　無職
中里雪（なかさとゆき）（16）中里の孫、高校生
尾山一郎（おやまいちろう）（40）オフィシャルグルメ・店長

①オフィシャルグルメ・ホール

食堂〝オフィシャルグルメ〟。窓側の座席の沢地邦子（75）の前に立つエプロン姿の尾山一郎（40）。邦子の膝には巾着が置いており、側には柱時計がある。制服姿の中里雪（16）は厨房前の座席に座っている。雪のテーブルにはミックスジュース、横には学生鞄が置かれている。顎に白髪の顎鬚をたくわえたエプロン姿の中里康（87）が厨房前、雪の目前で杖を片手にステーキ定食を持ったまま立っている。

中里、窓側の座席を注視している。

中里を見る雪。

雪の背後、窓際の邦子と尾山。

雪「おじいちゃん？」

雪、首をかしげ、邦子と尾山を見る。

邦子にメニューを差し出す尾山。

尾山「こちら本日のランチとなっております」

邦子、目を細めたり開いたりして、メ

ニューを閉じる。
邦子「紅茶をください」
尾山「かしこまりました」
尾山、中里と雪のほうに歩みよる。中里を見る尾山。
尾山「オーナー、雪ちゃん待ちわびてましたよ。ねぇ……ん？」
尾山を見ている雪。
邦子を見ている中里。
尾山「オーナー？」
邦子、店内を見回す。邦子、中里を見て、会釈する。
中里、目を見開く。
尾山「おぉなぁ」
中里「あ、あぁ、尾山君、ご苦労さま」
窓の外を見ている邦子。
尾山「もう、どうしたんですか？」
中里「あの人は？」
中里、邦子を見る。
尾山「先ほどおいでになったお客さんです」

尾山は厨房に戻る。
中里、ステーキ定食を雪のテーブルに置き、雪の向かいに座る。
中里「さぁ、召し上がれ」
雪「いただきます」
雪は手を合わせる。
テーブルの上のステーキ。雪、ステーキを切り、口に運ぶ。
雪、目を見開く。
雪「うん！　おいしい」
雪、ステーキをむさぼるように食べる。
中里、目を細める。邦子のほうに見る。
中里、杖をついて、邦子のほうに進み出る。
中里「くみこさん？」
邦子「どなたかしら？」
中里「私です。中里康……覚えていませんか？」
邦子「存知あげませんが」
中里「……」
中里、きびすを返し厨房に歩いていく。

座ったままの雪。

雪「おじいちゃん、知り合い？」

中里「……うん」

中里、上の空で厨房に入る。

柱時計が15時40分を示す。

②同・厨房

中里、真剣な表情で冷蔵庫を開き見る。

③同・ホール

柱時計が15時55分を示す。

中里、厨房から出てきて邦子のテーブルの上にシチューの入った皿とスプーンを置く。

邦子、中里を見る。

中里「どうぞ。こちらの料理は当店のサービスです」

邦子「あら？　そうですか」

中里、シチューを食べようとする邦子をのぞきこむ。

邦子「……どうかしましたか？」
　邦子、怪訝な顔をする。
中里「少しお話しませんか？」
　中里は邦子の向かいに座る。
　厨房から尾山が出てくる。
雪「尾山さん」
　雪、尾山を手招きする。
尾山「雪ちゃん。どうしたの？」
　ミックスジュースを飲む雪。
雪「おじいちゃんと一緒にいるおばあさん。
　誰ですか？」
　尾山、窓側の席のほうを見る。
　窓側の座席で向かいあう中里と邦子。
尾山「俺の知らない人だなぁ」
雪「……もしかして、おじいちゃん。知らな
　い人に絡んでるんじゃ」
尾山「まさか」
雪「でも、おじいちゃんも結構年だし……」
尾山「……」
　雪と尾山、中里を見つめる。

邦子と中里が向き合っている。
柱時計が16時の鐘を鳴らす。
中里「あの柱時計は開店当初からありましてな。もうかれこれ50年になります」
邦子「そんなに前から……50年前なら、私もこの町に住んでいたはずなのに全く知りませんでしたわ」
中里「何度か建て替えたので、覚えていても、わからないですよ。それこそ、開店当時と店名も変えてしまいましたしね」
窓の外を見る邦子。
窓の外、シャッター通りの商店街。
邦子「町もずいぶん変わりましたね」
中里「そう。昔はこの店の前はもう海が広がっていました」
邦子「とてもきれいな海で……そうだ。この近くに喫茶店ありませんでした？」
中里「喫茶店……尾山君、知っているかい？」
中里、尾山を見る。
尾山「少し前までは数件ありましたね……山

側の国道沿いにならファミレスがあります」
邦子「そうですか」
中里「どうかなさいましたか？」
邦子「いえね、喫茶店でよく、こう海を眺めていたのを思い出しまして……」
中里、身を乗り出す。
中里「その時、こう、何かしていませんでしたかな？」
中里、震える手で、中空でペンで筆記している素振りをする。
邦子「何を……あ！　文章を書いていました」
中里と邦子、うなずく。
中里「ちょ、ちょっと待っていてください」
中里、立ち上がり、厨房に向う。

邦子と尾山、顔を見合わせる。

中里、紐で閉じた古びた原稿用紙の束を持って厨房からやってくる。
中里「やっぱりあなた、これの持ち主の〝く

みこさん〝じゃないですか!!」
邦子、首をかしげ、原稿用紙の束を手にとり、目を細めたり開いたりする。
中里、邦子の肩を揺らす。
中里「〝くみこさん〟！　〝くみこさん〟！
私ですよ」
邦子、眉を顰める。
邦子「〝くみこさん〟なんて知りません！」
邦子、机の上に原稿用紙の束を置く。
中里、邦子の肩から手を放す。
邦子「それに、私は〝くみこ〟じゃありません沢地〟くにこ〟です!!」
尾山「……」
雪「……」
邦子、そっぽを向く。
中里「（震える声で）……あ、あの、私は人違いをしてしまったのですかな？」
邦子、大きくうなずく。
中里、邦子の向かいに座り込む。中里、背もたれに体重を預け、溜息をつく。

中里「……不思議ですなぁ。いやぁ、世の中には自分と同じ顔の人が三人いると言いますからなぁ」
　中里は白髪のあごひげを触る。
中里「……いや失礼しました。知り合いかと思いまして」
邦子「私に似ていたんですか？」
中里「どうだったか……もう40年あっていませんから」
　中里、力なく視線を落とす。
　邦子、中里を見て、溜息をつく。
邦子「……それじゃ、何か頼もうかしら」
　邦子、巾着から取り出した眼鏡をかけてメニューを見る。
邦子「この、オムライスください」
　邦子、中里を見る。
邦子「あら、康（やす）ちゃんじゃないの」
中里「……え？」
邦子「あら、ごめんなさい。勘違いしてたわ」
　邦子、笑う。

中里「……くみこさん？」
邦子「だから邦子よ。どうりで聞き覚えのある声だと思ったわ。ごめんね。最近すっかり目が見えにくくなっちゃって」
邦子、顔を隠して中里の胸をたたく。
中里「えぇ、じゃぁやっぱり、わたしは、間違えてなかったのかい!?」
邦子「ぼけていたのは私みたい。だって康ちゃん。くみこさんなんて呼ぶから」
中里「おいおいおい、私のせいかい」
邦子「そうじゃないけどぉ……」
邦子、原稿用紙の束をめくり中里に微笑みかける。
中里の顔に笑みが広がる。
中里「そうだ！　今日は孫も来とるんです。紹介します。雪ちゃんおいで！　40年もあってないんだ。もうちょっと話そう！」
邦子「それもそうね！」
尾山と雪、顔を見合わせ窓側の座席に歩み寄る。

著者HP：烏野の箱庭